

## 中医総合診療 症例検討会 「中医学と総合診療 新しい出会いを求めて」

\*<sup>1</sup> 石川家明、\*<sup>2</sup> 木村朗子

\*<sup>1</sup> TOMOTOMO（友と共に学ぶ東西医療研修の会）代表、\*<sup>2</sup> ともともクリニック院長

### 【開催の目的】

総合診療における「臨床推論」と、中医学の「弁証論治」を比較して、両者の推論構造の異同を明らかにする。

### 【開催のねらい】

診療科目別に診察せずに、人間を全人的にとらえようとする「総合診療General Medicine」が注目を浴びているが、東洋医学は患者の愁訴を中心に入間を丸ごと診ようとした先輩格医療である。

「臨床推論」は患者の病態に対して、医療者がより良い診療を行うにあたっての一連の診療上の思考過程のことである。英語では“Clinical Reasoning”であり、「臨床の論拠」の意味と捉えることができる。臨床の論拠には、診断プロセスにおけるより高い論理性が求められる。そのために患者の訴える様々な症状に対しての医療的言語概念化が為されなければならない。

医療面接から得られる病歴を重視して、身体診察から得られた所見をあわせて臨床診断に至る過程を扱うには、病態生理をしっかり持つ分析的な中医学の弁証論治がふさわしい。

また、医療現場の実際では、西洋医学的病名が判明した途端に、西洋医学概念のくびきから逃れることはできない。よって現実的には東西両医学からの同時の医療推論が必要である。

実際の症例カンファレンス形式を通して東西両医学からの捉え方を対比して実践的理解を深める。

### 【概要】

たとえば、風邪を弁証にいたるSemantic Qualifier（適訳がないが、ここでは「愁訴の医療的言語概念化」と訳しておく。）として捉えてみると幾つかの概念の重複があることがわかる。これは、中国医学の通用言語（technical term）の曖昧さや、混乱からくるのではなく、中国思考の一つの大きな特色である概念定義の多重性から由来していると考えている。

しごれ・痛み・関節痛を愁訴を持つ患者は、プライマリケアの現場では多い。中国医学では痹症であるが、風・寒・湿・熱の邪氣で構成される。その中の風邪は疾病成立の重要な役割を担っているが、複数の概念を含有している。

発症様式（onset）を明らかにすることは医療面接の最初の大切なポイントであり、臨床推論における重要な情報となる。特に一部、神経内科疾患や整形外科疾患においては、ほとんど鑑別疾患が絞れてしまうことさえある。発症様式においての風邪は「突発発症」